

# 戦後日本の夢を抱いて

一九四五年生まれ 新聞記者

朝日新聞コラムニスト 早野透

- 戦後政治を主導した「平和と平等」
- 戦後政治の普及教養
- それでもやっぱり「平和と平等」

今年の八月一五日の終戦の日、東京・千鳥ヶ淵の戦没者墓苑をお参りしたり、八年前のこの日に亡くなった丸山真男東大教授の「復初忌」に参加したりして帰宅して、夜はアテネ・オリンピックの興奮の合間を埋めるように放映していたNHKスペシャル「子どもたちの戦争」を見た。

そうなんだね、あの戦争を戦場で戦い続後で支えた世代はだんだん鬼籍に入って、あのころ子どもだった世代が戦争の記憶を残しておこうと思っっているんだね。テレビは、田舎に疎開した女の子が東京の家を空襲で焼かれて母ときようだいを失い、外地に出征していた父もまた戦死、ひとりでみんなの分まで生きなければと戦後の年月をがんばってきた話だった。NHKのなかに八月一五日にこういう番組を作ろうという人たちがいる間は、日本もまだ何とか大丈夫な気がする。

戦後五九年、「現代の理論」の復刊を機に「戦後政治」を振り返ろうとすれば、あの戦争は何だったのかをもう一度確かめなければならぬ。「戦争」とは何だったかがわからなければ「戦後政治」は何だったかもわかるはずはない。

七月の参院選で引退した一九三四年生まれの大脇雅子さん（社民党から無所属）が戦時下の少女時代の思い出を描いた「マサコの戦争」（講談社）にこんなくだりがある。

文ちゃんは「朝鮮人、朝鮮人」といわれていつもひとりぼっち。国民学校の運動場の国旗の掲揚台の下で文ちゃんと話した。

「文ちゃんのお父さんはいるの」

「シナで戦死した。あの日の丸の旗を見ると、お父ちゃんを撃った大砲の玉に見える」

二人で鉄棒にもたれて、青い空にはためく日の丸を黙っ

て長い間、見上げていた……。

北海道函館市でタウン誌「街」を発行している一九二九年生まれの木下順一さんからは「少年の日に」という自伝小説を送っていただいた。彼は結核のために小学校に上がった年に右足を切断した。中学を受験すると、一度二度と不合格になる。不審に思つて中学校長に聞きに行く。

「君にああいうことはできるか」。窓の外を見ると、中学生たちは重い荷をかかえて走っている。「今や中学校は軍事教練ができなければ入学させるわけにいかないんだ」と嬉しそうに堂々と校長は言ったのだった。

近所の牧師夫人が慰めてくれた。「片足に税金は使いたくないでしょう。差別で野蛮な思想です。戦わなければだめね」。

### 戦後政治を主導した「平和と平等」

一九四五年八月一日。海ゆかば水漬くかばね、山ゆかば草むすかばね。そう思いこんでいた当時の大人たちがようやくやぐ軍事国家から解放され、丸山真男の著名な論文「超国家主義の論理と心理」によれば、自らの運命を自らがつくる「自由なる主体」になった日である。では、子どもたちは？朝鮮人の女の子にとって、戦争は民族差別だった。あるいは植民地差別だった。片足の少年にとって、戦争は障碍差

別だった。この子どもたちにとって、戦争は「差別」と同義語だった。であれば、敗戦は戦争が内包する「差別」にひとまずピリオドを打つものとして、こんな子どもたちも胸を膨らませたはずである。

八月一五日以前がすなわち「戦争と差別」を意味していたとすれば（差別という言葉には大日本帝国の抑圧体系も含めた）、八月一五日以後の意味するものは「平和と平等」にほかならなかつた。

戦争はもうこりこりだ！ 平和憲法！ 戦争放棄！ そんなことが可能なんだね。思えばなんという妄想を信じていたんだろう。人はみんな同じなんだね。「平等」は「民主主義」と言い換えてもいい。お国のためにがまんするだけでは生きているかいない。お困つていったい何だったんだ。これからは、食うや食わずの生活じゃなくて、もっと豊かになりたい。国のために生きるのではなく、自分のために生きる！

であれば、「戦後政治」を主導してきたものも、一言でいえば「平和と平等」という価値である。山口二郎北海道大学教授が近著「戦後政治の崩壊——デモクラシーはどこへゆくか」（岩波新書）で「失われる平和、崩れゆく平等」と憂えている。いま政治記者の経験の中から「戦後政治」を語ろうとすれば、われら戦後世代には永久に奪われてはならない価

値と思えたものがいまだこへ行ってしまうのか、やはり「平等と平等」の行方がテーマである。

「戦後政治」を年を追って、あるいは吉田茂、鳩山一郎、岸信介、池田勇人、佐藤栄作という具合に権力人脈を追って語ろうとすれば、もう戦後五九年も経つものだからきりがない話になる。私は自分でも存分に接した田中角栄という政治家からまず「戦後政治」のエートスに接近してみたい。

新潟から一五歳で上り列車に乗って上京、下積みの仕事を転々、中国戦線に出征、病を得て日本に戻って土建業者として活動を始めたときに敗戦。そんな戦前の経歴を持つ田中角栄は戦後二回目、一九四七年四月の総選挙で二八歳で初当選する。戦後になっての総選挙では新人議員が八〇％を超えた。田中もまた「戦後」とともに登場した政治家群の一人だった。

「おのれのみを正しいとして、他を容れざるは民主政治家にあらず。議員は一人というも、これが背景に一五万五千人の国民大衆があつて、その発言は国民の血の叫びなのであります」と少壮の角栄が国会で演説したときには、確かに民主主義の代表意識がめざめていたであろう。「住宅は一家の団禁所であり魂の安息所である」といふ「戦災の母子は何もいらぬから家を与えてくれといっている」「働く人に家を与えずして何が民主主義か」と述べ、議員提案で公営住

宅法をつくった角栄には、権利としての平等だけでなく、人々の暮らしの質的平等という「公共」理念があつたといつてもいいだろう。

角栄の選挙区新潟三区は山並み重畳とした地形である。その一番奥地にわずか三七戸の小松倉という集落があつて、外界との連絡は上り下り二〇〇メートル、七キロの中山峠しかなかった。冬は吹雪のなか、病人が出れば医者を迎えにいきおぶつて峠越えして連れてきた。だが、医者が着いたころには、病人は死んでいた。

一九三三年、村の人々はたまりかねて自分たちでつるはしを握つて峠の下にトンネルを掘りはじめた。しかし四三年、半分ほど掘り進んだところで戦争で中断した。戦後になつて県庁からわずかな補助金をもらつて工事を再開、四九年に完成した。それはでこぼこ道で針金を伝つて辛うじて通れるものだったけれど、人々は祝ひ酒に酔つた。

それから月日がたつて、田中角栄は自民党の権力の階段を急速に上つて身につけた政治力で、この手掘りのトンネルを国道に指定させた。国道になれば、国からどかんと補助金が出る。そうすれば、こんどは車の通れる新しいトンネルを掘ることができる。角栄が死んでから五年、一九九八年にその新しいトンネルができた。

角栄が首相の座に挑んだときに世に問うた「日本列島改

造論」のモチーフは、「国土の均衡ある発展」である。それは新幹線や高速道路など大動脈の整備にとどまらない。山奥のわずかな住民にも目を配って、できるだけ都会と同じ暮らしができるように、一〇億、二〇億の国費をつぎこむ。過剰投資じゃないかって？ 何をいうのか、それが「公共」ということではないか。だからこそ道路や橋をつくる土木工事を「公共事業」というのではないか。けなげにも自分でつるはしを握った人々はどんなにか、「戦後政治」のありようがうれしかったであろう。平和はもちろんのこと、日本のどこに生まれても人並みの豊かさを味わえる……。

樺島郁夫東大教授によれば、経済成長の果実を経済成長から取り残された社会集団に政治的に配分して長期政権を維持する、それが自民党システムだった。「国土の均衡ある発展」はそのキーワードだった。田中角栄こそ自民党のエリートスだった。それはとりもなおさず、「平和と平等」から出発した「戦後政治」のエートスだった。

「平和」という点でも、「戦後政治」はまことに理想にあふれていた。

戦後憲法と日米安保体制の原点は吉田茂首相である。吉田はこう国会答弁した。「正当防衛の戦争を認めると戦争を誘発する。有害無益の議論と考える」

初め吉田は、憲法九条は「自衛権」さえ否定したものと認

めた。しばらくして、さすがに武力によらない自衛権はあるといふところまで認めた。

「両刀を捨てては自衛できないと魔刀令に士族が反対したけれども、武力によらざる自衛権はある。外交その他の手段で国家は国家を守ると確信する」

だが、朝鮮戦争が勃発して自衛隊をつくった。吉田も「必要最小限度の実力は憲法九条に違反しない」という解釈に行き着く。「戦後政治」を方向付けた吉田路線、すなわち「軽武装、経済優先」の国家ビジョンは、この憲法解釈から出発したものであつたらう。「非武装中立」の社会党もうるさいから、まあ自衛隊増強はほどほどに経済成長の範囲内でね、ということでもあつたらう。「防衛費のGNP一%枠」がしかるべき基準になっていた時代もある。しかし、経済発展は著しく、ほどなくアメリカについて世界第二の経済大国になるのだから、「必要最小限度」でも自衛隊はいつのまにか世界有数の軍隊に育っていくのだが。

一方、反吉田の鳩山一郎ははっきりと憲法改正をして再軍備するのを望んでいた。日米安保条約を双務的に改定した岸信介もむろん自衛隊を強くしたかった。自民党の党是が「憲法改正」であり続けているように、あるいは戦前同様にも見える思想系列も生きていた。しかし彼らにしても、さすがに日本の侵略戦争の歴史を消し去るわけにはいか

ず、わが自衛隊はわが国土国民を守るものであって、自衛隊が海外出動するなんてつゆ思わなかった。

岸はこう答えた。

「自衛隊が日本の領域外に出て行動することは一切許さない」「海外派兵はいたしません」

岸の弟で吉田に次ぐ長期政権を維持した佐藤栄作もまたこう述べた。

「もうわが国の憲法からは、日本は外へ出ていく、そんなことは絶対ないのでございます」

「戦後政治」の視座からすれば、時のタカ派権力系列がどんなに想像をめぐらしても、戦前のわが皇軍のごとくアジアの奥地、外洋を駆けめぐることがありうべくもないことだった。岸はこんなことまで断言した。

「日本の平和と安全と直接密接な関係のないような事態に対しても米軍が出動することは、日本は拒否する」

### 戦後政治の春夏秋冬

先走っていえば、二〇〇四年夏、在沖縄米軍の普天間基地の大型輸送ヘリが大学構内に墜落して、日本がヘリの飛行中止を申し入れているにもかかわらずヘリの飛行を再開、戦地のイラクへ向かったりしたことには、岸だったら断固拒むべきことだったろう。しかし、すでに「戦後政治」は変

貌を遂げて、夏休みの小泉純一郎首相は何の異議も表さなかった。

戦後が五十九年を重ねるうちに、「戦後政治」はいつのまにか少しずつ変質した。

あの「平和と平等」を夢みた季節は、いつ過ぎてしまったのか。平和憲法が新鮮だった時代、まだ貧しかったけれど日本の未来に希望を抱かせていた時代、あるいは血気さかんな若者が革命を信じて党派をつくり走り回っていた時代、六〇年安保の街頭デモが盛り上がりつつ大衆が岸内閣を打倒したように思えた時代、たぶんここまでは「戦後政治」の春だったのだろう。

「戦後政治」の夏は、池田勇人内閣の「所得倍増計画」とともにやってきた。「寛容と忍耐」で政治的軋轢を鎮めて、「一〇年で国民所得を二倍に」と高度成長へのエンジンを吹かした時代、日本がIMF(国際通貨基金)八条国になりOECD(経済協力開発機構)に加盟して先進国の仲間入りした時代、テレビが普及して新幹線が開通して東京オリンピックが催されてみんなが浮き浮きした時代。そのあと、来る日も来る日も総理大臣は苦虫をかみつぶしたような佐藤栄作でいいかげんうんざりしながらも沖縄返還までこぎつけた時代。あのあたりが「戦後政治」の夏の終わりだっただろうか。

そして「戦後政治」の秋が来る。一九七二年の田中角栄内

閣の成立、日本列島改造論が裏目に出た地価騰貴、おりしも中東戦争から波及した石油価格の高騰、物不足と買い占め売り惜しみ、そしていわゆる田中金脈問題での退陣劇、ロッキード事件の田中逮捕……。『今太閤』がなんでこんなことになってしまったのか。

民主主義の息吹だったはずの角栄が派閥政治の権力追求者になり、さらには「閣將軍」と呼ばれるようになる。人々の生活の安寧のための公共事業は時移って、政治にとって票を、官僚にとっては権限を、業界にとっては利益をむさぼるための政官財の癒着関係に変わる。その公共事業はほんとに必要なものかどうかだつて？ そんなことは構うこととはない、むだだろうが何だろうが、国家財政がどうなろうが、空気を水を汚そうが、要するに地元の土建業者にカネを落とすことをもって政治家のなりわいとする、そんな政治に変わっていく。

人間は墮落する。社会は墮落する。制度もまたいつしかさまざまな既得権益のグロテスクな塊になる。そこに賄賂がはびこる。「戦後政治」の秋はロッキード事件から始まって、ダグラスグラマン事件、リクルート事件、東京佐川急便事件などスキャンダルに次ぐスキャンダルになる。われわれの世代の政治記者の仕事はスキャンダル政局を追うことに占められた。田中支配、竹下派支配……。表で踊る役者と

裏で動かすシナリオライターの組み合わせで政治を牛耳る二重権力の時代が続く。国民はようやく「戦後政治」の墮落にうんざりして「新しい何か」の登場に飢えるようになる。

「戦後政治」の冬が来る。一九九三年、東京佐川急便事件で金丸信の事務所から金の延べ棒が押収されるシーンがテレビでリピートされて、さしもの自民党も下野する。「一瞬の雲の切れ間に躍り出ていった」ような「日本新党」をつくった細川護熙を首相とする非自民連立政権ができた。官僚支配を排して政治主導にせよ、生活者主権にせよ、地方分権にせよ。

さて、細川政権をコーディネートした小沢一郎こそ「戦後政治」のギアチェンジをした人物といつていいだろう。小沢は角栄に可愛がられながら角栄に弓を引いた。自民党を脱党して新生党をつくった。「改革」を唱え、中選挙区から小選挙区への制度改革の原動力になる。それによって万年与党の腐敗と万年野党の怠惰をもたらした五五年体制を打破して政権交代の緊張感を取り戻したい。小沢は自民党に代わる「もうひとつの政権政党」をつくるべく、新党をつくっては壊し壊してはつくるシジフォスとなる。

小沢は個の自立を主唱して、五五年体制を「もたれあい政治」と断じた。確かに、「戦後政治」の「平等」という価値は、いつか退嬰的な「もたれあい」となり官僚主導の「護送船団」

となつて、人々の進取の気象が失われる。こんなことではグローバリゼーションの国際競争時代に日本は亡びる！もつと自己責任を！もつと競争を！

それから一〇年に及ぶ「改革」と「連立」の時代、「戦後政治」への決別に役割を果たすべく小沢に次いで菅直人が現れた。菅は薬害エイズ問題で官僚支配に風穴をあけて「民主党」結成を主導した。スローガンは「市民が主役」。菅は「戦後政治」の中からようやく析出してきた自覚的市民による「市民政治」の戦略家だった。だが、菅の後続ともいえるNPOの旗手辻元清美が挫折するなど、「市民政治」には逆風も吹いた。小沢も菅も「戦後政治」にピリオドを打って、新しい春を呼ぼうとした。だが、その営みはまだ政権に届かず、途上にある。

「戦後政治」の主要な担い手だった自民党を「ぶっ壊す」と、自民党側から彗星のように現れたのが小泉純一郎だった。自民党の崖っ淵に乗じて角栄の娘田中真紀子と手を組んでポピュリズムの風を巻き起こして政権を篡奪した「変人」小泉こそ、ここまでの最大の壊し屋だった。

人の言うことをきかず、派閥順送りの大臣登用を排した。角栄と角福戦争を繰り広げた福田赳夫の弟子である小泉は田中派の後裔派閥を分断し機能不全に陥らせた。六〇〇兆から七〇〇兆にのぼる国と地方の財政赤字は「平等」のため

にカネをそそいだ「戦後政治」のツケともいうべきものだった。小泉はこれをわずかでも削減すべく、高速道路の民営化を策し、病院の窓口負担を三割に増やし、年金保険料アップと給付抑制を果たし、郵政民営化で二六万公務員を減らそうとする。「民でできるものは民へ」「地方でできるものは地方で」という小泉の構造改革テーゼは、「戦後政治」の終焉を意味する。

### それでもやっぱり「平和と平等」

だが、小泉の成果は自民党内の抵抗勢力との確執妥協で必ずしも十分でない。自民党総裁でいて自民党をぶっ壊すのは基本矛盾がある。ゴルバチョフが日本のことを「世界で唯一成功した社会主義国家」と加藤紘一に語った、それはムラ社会日本の伝統にも根ざしててそう簡単には壊れない。

だが、「戦後政治」の冬の時代、憂うべきは「戦後政治」のもうひとつの価値「平和」が決定的に損なわれたことだった。

ベルリンの壁が壊れ東西冷戦が終わってまもない一九九〇年、イラクがクウェートに侵攻、翌年一月、アメリカを中心とする国連多国籍軍がイラクを攻め返す湾岸戦争が起きた。日本は一三〇億ドルの支援をしたけれども「血と汗」は流さなかった。何だって、そんなとき自衛隊を海外に出してともに戦うべきだって。「戦後政治」の「平和」とは、とり

もなおさず自衛隊を海外には派遣しないということだったのに、その禁を破らなければならないのか。自衛隊海外派遣こそ「戦後政治」の冬の吹雪だった。

小沢はこの点でも「戦後政治」のギアチェンジを試みた。

「真の国際国家になるためにはどうしたらいいか。何も難しく考える必要はない。「普通の国」になることである」

国連の指揮下で自衛隊が出動するのは、たとえ武力行使にわたってもこれは九条の禁ずる国権の発動ではない。国連の旗の下で「血と汗」を流すのは「普通の国」として当然のことである……。

それからの一〇年、自衛隊のブーツは一步一步海外の土を踏んだ。国連PKOでカンボジア和平にかけた。PKOは紛争の後始末のお手伝いだから武力行使にはおおよばない。しかしPKOだけではない、日米安保の再定義が行われて、「非戦闘地域」で「武力行使と一体にならない」のならば、自衛隊は海外にでかけてアメリカに協力できるという理屈が考え出される。

さあ、これで、平和憲法のもとでも、いつでも自衛隊は海外にいけるぞ、もちろん小沢がいうような武力行使までするつもりはないけれど……。

のつびきならぬ事態が起きた。

二〇〇一年九月一日、ニューヨークの貿易センタービ

ルにテロリストの飛行機がつっこんで世界規模の「テロとの戦い」が始まる。ブッシュと小泉は「真昼の決闘」のゲーリー・クーパーの話で意気投合、日本の自衛隊は日の丸の歓呼に送られてアフガニスタン、イラクにかけた。

「戦後政治」を主導してきた二つの価値、「平和と平等」は二つながら傷ついて氣息奄々である。もういいじゃないか、よくがんばってきたじゃないか、「戦後政治」は一場の夢だったんだよ、反戦とか非戦とかこだわらないで、弱い人目配ってみんな助け合う社会をなどと気張らないで、そろそろ「普通の国」でいいんじゃないか、それでそんなに世の中、変わるものでもないよ、世界の血まみれの混乱を見れば、日本なんて上等じゃないか……そんな声も聞こえて来る。

いやそうじゃない、「戦後政治」がめざした価値はもって普遍的価値だったのだ、いまいろんな歴史の紆余曲折があつても、人間世界のいきつく理想はやつぱり「平和と平等」なんだよ、ロシアの学校テロなどをみれば、人間なんて一皮むけば悪魔だということかもしれない、だが、やつぱり人間を信じたい、人間に生まれて来たのだから。そんな声も胸の奥から聞こえてくる。

一九四五年生まれ、新聞記者。私はやつぱり「戦後政治」の夢を抱いていきたい。

(はやの・とおる)